

接続語「だから」の意味・用法

——前件と後件に因果関係が認められる「だから」を中心に——

劉 怡 伶*

キーワード: 接続語, 「だから」, 因果関係, 知識「 $P \rightarrow Q$ 」, 共起

要 旨

本稿は前件と後件に因果関係が認められる「だから」の意味・用法を記述することを目的とするものである。「だから」を用いる時に話し手の中に因果関係の知識が働いていると考えられる。本稿では、この因果関係の知識の特徴、及び前件と後件との関係の考察を通して「だから」の意味・用法を記述した。その結果、「だから」の前件と後件の基底には必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があることが明らかになった。また、話し手は「だから」を用いる時、自分の中にある知識「 $P \rightarrow Q$ 」が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する可能性があることが分かった。このように「だから」の特徴を把握することにより、共起の特徴に対しても、文脈によって生じる異なるニュアンスに対しても統一的な説明を与えることを述べた。

1. はじめに——問題の提起

下に示すように「だから」¹は前件と後件の因果関係を表す接続語である。

(1) 田中さんは公務員だ。だから、不況の時も失業する心配がない。

(横林・下村(1988: 21))

先行研究(森田(1980)、ひけ(1987)、横林・下村(1988)など)では「だから」を記述する

* LIU Yi-Ling: 東呉大学日本語文学系助理教授。

¹ 蓮沼(1991)の指摘のように、話し言葉においては前件と後件に因果関係が認められない「だから」がある。例えば、下の例(i)はその例である(但し、例(i)は筆者によるものである)。

(i) (物置部屋で寝ようと言われて怒っている寅に対するさくらの発話)

さ: こんなことはじめてじゃないでしょ、いつだって気持ちよく二階の物置部屋に寝てくれたじゃない、

さ: ね、だからお願い、怒らないで……ね、お兄ちゃん (シナリオ『男はつらいよ』)

この場合の「だから」を分析するために本稿で用いる概念の他に、van Dijk(1979)の「発話行為(speech act)」の概念を加える必要があると考えているが(劉(2004b)を参照)、紙幅の関係で別稿に譲る。なお、記述の便宜のため、本稿でいう「だから」は前件と後件に因果関係が認められる「だから」をさす。

時に、後続文に「たい」「う/ ようと思う」「てください」など話し手の希望、意志、命令を表す表現を用いることができる点に注目している。しかし、劉（2004a）で示しているように、同じく前件と後件の因果関係を表す接続語「したがって」「それゆえ(に)」の後続文にも話し手の希望、意志、命令を表す表現を用いることができる。従って、後続文の文末形式に注目するだけでは「だから」の特徴を十分に捉えることはできない。

本稿では「だから」に関する次の言語事実に注目する。

蘆 「だから」の直前に逆接の接続語「しかし、でも」が現れることがある。

- (2) (つらい体験をしたので)私は人間の正義は信じていません。でも、だから、夫のような誠実な人がいることがうれしいんです。(毎日新聞 96.8.18)
- (3) 日本自身が閉そく感に取り巻かれ、見通しが不透明な時代ではある。しかし、だからこそ、内向き志向に陥るのではなく、潜在的に高い成長力と可能性を持つ ASEAN との協力強化が重要だ。(毎日新聞 97.12.24)

蘆 「だから」の直後に「こそ」「か」「とって(って)」をつけ、「だからこそ」「だからか」「だからといって(だからって)」の形で前件と後件を接続することがある。

- (4) 欧米では、新聞は国民の「知る権利」の負託を受け、その権利を厳正に行使する義務を負うものとされる。だからこそ、政府(権力)もその新聞の自立性、「報道の自由」を侵してはならないということになる。(毎日新聞 99.4.6)
- (5) 人気ナンバーワンの神様は「ラーマ」だ。インドの大叙事詩ラーマヤーナに描かれたコーサラ国王。敵国に誘拐された妻を、猿神と猿の軍隊の助けを借りて救出した英雄である。だからか、門前にはサルがひとときわ多い。ここは、ラーマの生誕地とされている。(毎日新聞 98.3.23)
- (6) この老婦人にはお気の毒だと思います。しかし、だからといって、生活保護の適用を緩和するのにはいちがいに賛成はできません。(毎日新聞 94.9.10)

「だから」の直前と直後にどんな表現が現れ得るかはこの語の持つ意味的な特徴によって制限されると考えられる。従って、直前と直後に共起し得る表現を考慮に入れることは「だから」の意味・用法を記述するための有効な方法であると言える。本稿では、これらの言語事実に注目し、「だから」の意味・用法のより一般性のある記述を試みる。

なお、多くの先行研究(例えば、森田(1980)、横林・下村(1988)など)では、「だから」と「ですから」は文体的特徴という点だけで区別されている。しかし、「ですから」は「*{しかし/でも}、ですから」、「?? ですからこそ」、「*ですからか」、「*ですからといって(*ですからって)」の形で前件と後件を接続することが不自然なことから、意味・用法上「だから」と異なるもので

あると考えられる。そこで、ここでは「だから」と「ですから」を区別し、「ですから」を考察対象から除外する。

因果関係を表す接続語を用いる時に話し手の中に因果関係の知識²が働いていると考えられる(坂原(1985))。以下、「だから」の話し手の中に働いている因果関係の知識の特徴をはっきりさせることにより、「だから」の意味・用法を体系的に捉えることができることを論証する。

2. 「だから」の前件と後件の基底にある知識「 $P \rightarrow Q$ 」

2. では「だから」は前件と後件の基底に必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があることを見る。ここでの知識「 $P \rightarrow Q$ 」とは一つの条件からただ一つの帰結が導かれる知識のことである。また、前件と後件の基底に必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があるということは、「だから」を用いる時に話し手の中に必ず知識「 $P \rightarrow Q$ 」が働いている、ということである。但し、こうした因果関係の知識は聞き手と共有しなくても問題にならないのである。この点については3. で述べる。

まず、(7)(8)は「だから」の例である。それぞれの前件と後件の基底には「雨が降っている → 傘を持っていく必要がある」、「会社からの電話を待っている → 電話が繋がるようにしたいので(電話を)切る」といった知識があると考えられる。つまり、「だから」の前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があると言える。

(7) 雨が降ってきた。だから傘を持っていきなさい。(森田(1980: 195))

(8) 俺? うん、今会社からの電話待ってるとこなんだよ。だから切るよ。

(シナリオ『男はつらいよ』)

このように「だから」の特徴を捉えることが有効であることは次の例から窺える。(9)は三段論法の例である。この場合に「だから」は用いられるが、同じく因果関係を表す接続語「そのため」、「その結果」は用いられない。

(9) すべての M は P である。S は M である。だから / *そのため / *その結果, S は P である。

(9)の後件で述べている結論を出すには、「すべての M は P であり、かつ S は M である → S は P である」といった知識、つまり知識「 $P \rightarrow Q$ 」が必要であると考えられる。この例から、「だから」を用いる時、前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があることだけでなく、すべての因果関係を表す接続語を用いる時、前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があるというわけではないことが分かる。前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があることは、「だから」と「そのため」、

² 本稿でいう因果関係の知識とは、P が Q を引き起こしたり、または P が Q のきっかけとなったりするような関係に関する知識のことをいう。また P と Q と認識されるものは現実世界に起こる事態をはじめ、人間の感情、感覚、行為の目的・意図、思惟における判断を含む。詳しくは劉(2004b)を参照のこと。

「その結果」と区別する特徴であると言える³。

次に、知識「 $P \rightarrow Q$ 」の概念で話者交替を伴う「だから」と(7)(8)のような話者交替を伴わない「だから」とを同じように扱うことができることを見る。

(10) 霞: (喪服を着ると)どんな女でもよく見えるって、よく男の人いいですね。
伊織: だから、いい女はもっとよく見える。(蓮沼(1991)の例(7))

(11) A: 今夜は雨になるそうですね。
B: だから、私、傘を持って来ました。(グループ・ジャマシイの例(4))

(12) (申込者が担当者に移動の手段を質問している)
担当者: はい、行きが羽田から大阪空港まで、帰りは広島空港から羽田まで飛行機を使って移動いたします。
申込者: だから、けっこういい値段になってしまうんですね。(『ATR』⁴)

(13) A: あの人たち、夏休みに3週間も沖縄に行っていたんだって。
B: だから、真っ黒に日焼けしているんだね。(蓮沼(1991)の例(9))

(10)~(13)の前件と後件の基底に「喪服を着るとどんな女でもよく見えるとよく男の人が言う → いい女はもっとよく見える」、「雨になるそうである → 傘を持ってくる必要がある」、「往復は飛行機を使って移動する → いい値段になってしまう」、「あの人は夏休みに3週間も沖縄に行っている → 日焼けしている」といった知識があると考えられる。また、これらの場合、前件と後件を繋いでいるのは「だから」を用いた話し手なので、前述した知識「 $P \rightarrow Q$ 」が話し手の中に働いていると考えられる。従って、(10)~(13)における「だから」は(7)(8)の「だから」と同一視することができる。

因果関係の知識との関係からこれまでの「だから」の前件と後件を見ると、前件は話し手の中の因果関係の知識における条件(つまりPの部分)となるものを表すもので、後件は前件の示す条件から推論した帰結(つまりQの部分)を踏まえての話し手の判断・態度⁵を表すものである。

³ 接続語「したがって」と「それゆえ(に)」の前件と後件にも知識「 $P \rightarrow Q$ 」がある(劉(2004a, 2004b)を参照)。「だから」とこの2語の違いについては、3.と4.で述べる。なお、劉(2004b)では、「そのため」と「その結果」の前件と後件の基底にはそれぞれ知識「 $P' / P'' / P''' \dots \rightarrow Q$ 」と知識「 $P \rightarrow Q' / Q'' / Q''' \dots$ 」があると述べられている。詳しくは劉(2004b)を参照されたい。

⁴ 『ATR』は名古屋大学国際言語文化研究科に設置されているATR対話データベースのことである。

⁵ ここでの話し手の判断・態度は帰結の言語化に關与する話し手の主観のことをいう。接続語が導くのは因果関係の知識に基づき推論された帰結そのものではなく、帰結を言語化した結果、即ち後件である。従って、帰結を言語化する過程で話し手の判断・態度が入ってくると思われる。知識「雨が降りそうだから → 傘を持っていく必要がある」を例とすると、推論された帰結が言語化される場合、①「傘を持っていく必要があります」、②「傘を持っていく必要がある」、③「傘を持っていく必要があるかもしれない」、④「傘を持っていってください」、⑤「傘を持ってってね」など幾通りかになる可能性があると考えられる。①②③のような演述型で表すか、或いは④⑤のような情意表出型の文で表すかは話し手の表現態度によると考えられる。また、聞き手の存在に配慮する表現(例えば「です、ます」体、「ね、よ」)で表すかどうかは話し手の伝達態度によると考えられる。更に、①②のような断定を表す表現、③のような蓋然性を表す表現で表すかどうかは話し手の判断によると考えられる。但し、断定ではなく蓋然性を表す表

従って、「だから」の後件は前件の示す条件から推論した帰結に話し手の判断・態度が加わったものであると言える。

(14)(15)における「だから」は一見したところ、これまでの「だから」と異質なもののように思われる。

(14) (町の病院の前⁶)

満男: だから病院は嫌なんだよ、こんなおおげさに包帯なんか巻いちゃってさ

泉: 大丈夫? (シナリオ『男はつらいよ』)

(15) 寅: 何んだ博, 怪我したのか, お前?

博: ええ, 工場の機械でちょっと.....

寅: そうだろう, だから前から言っているんだよあぶない, あぶないって, (後略).

(シナリオ『男はつらいよ』)

しかし, (14)(15)の「だから」は2. で見た他の例と同じ用法にまとめることができる。例えば, (14)では, 眼前の状況⁷を言語化すれば次のようになる。

(14)' 「病院に来たら余計な処置を受けてしまった。」

また(15)では, 「だから」の前件「そうだろう」を眼前の状況に基づき復元⁸すれば次のようになると思われる。

(15)' 「予想通り, 工場で怪我をすたさろう。」

(14)'(15)'を前件として考えると, それぞれの前件と後件の基底に知識「病院に来たら余計な処置を受けてしまう → 病院が嫌い」, 「工場で怪我をする可能性がある」と予想する → 危ないと言う」があると考えられる。従って(14)(15)の「だから」はこれまでの「だから」と同じものであると言える。

ここで次の点に注目してみたい。即ち, 前述した知識「 $P \rightarrow Q$ 」の概念で文脈によって生じる異なるニュアンスについても説明することができる, ということである。例えば, (12)(13)では他の「だから」にない, 話し手の納得する気持ちを表すニュアンスが含まれている。また, (14)(15)では他の「だから」にない, 「ほら, やはり私の予想通りだ」という話し手の気持ちを表すニュアンスが含まれている。そして, どちらの場合にも, 「だから」の「だ」がやや強調されるように発音され, 文末に「のだ」を伴っている点が特徴である。これらの場合の音声や文型の

現で表そうと話し手が決断した場合, 当該の帰結が推論されること自体が妥当でないことを意味しない。あくまでも知識「 $P \rightarrow Q$ 」そのものが成立することを断定することができないことを意味する。なお, 本稿で考えている話し手の判断・態度は仁田(1989, 1999)の言っているモダリティに相当する。詳しくは仁田(1989, 1999)を参照のこと。

⁶ (14)は映画のワンシーンである。このシーンは満男の発話から始まっている。

⁷ 本稿でいう「眼前の状況」とは, 「だから」で始まる発話の直前まで行なわれた発話内容(先行文脈)及び言語化されなかった当時の発話状況のことを指す。但し, (14)のような先行文脈のない場合は言語化されなかった当時の発話状況のことだけになる。

⁸ ここでの「復元」の意味は言わなかったことを言葉で表現するということである。

特徴は蓮沼 (1991) でも記述されている。

(12) (13) に話し手の納得する気持ちを表すニュアンスが含まれている理由は次のことに関係している。下に示すように、(12) (13) では (10) (11) と異なり、「だから」で始まる発話の直前に「なるほど」を用いることができる。ここから、(12) (13) の前件は話し手にとって新情報であることが窺える。

(10)' 霞: (喪服を着ると)どんな女でもよく見えるって、よく男の人いいですね。

伊織: ?なるほど。だから、いい女はもっとよく見える。

(11)' A: 今夜は雨になるそうですね。

B: ?なるほど。だから、私、傘を持って来ました。

(12)' 担当者: はい、行きが羽田から大阪空港まで、帰りは広島空港から羽田まで飛行機を使って移動いたします。

申込者: なるほど。だから、けっこういい値段になってしまうんですね。

(13)' A: あの人们、夏休みに3週間も沖縄に行っていたんだって。

B: なるほど。だから、真っ黒に日焼けしているんだね。

(12) (13) の場合には、「だから」の表している話し手の判断の根拠が最初から話し手の中にあるのではなく、聞き手の発話を聞いて初めて話し手の中に存在するようになったと考えられる。言い換えれば、その時点になって初めて話し手の判断は聞き手の発話によって裏付けられたと言える。話し手が前件と後件の基底に因果関係の知識が存在していることに気付き、聞き手に確認しようとしていることは「だから」の後続文に終助詞「ね」が用いられていることから窺える。(12) (13) の「だから」には、話し手の納得する気持ちを表すニュアンスが含まれているのはこのためであると考えられる。

次に、(14) (15) では、(12) (13) と異なり、「ほら、やはり私の予想通りだ」という話し手の気持ちを表すニュアンスが含まれている理由は次のことに関係している。前述のように、(14) (15) の前件は眼前の状況に基づき復元されるものである。つまり、「だから」の後件で表している話し手の判断は(12) (13) と異なり、聞き手の発話ではなく、発話時における眼前の状況によって裏付けられたものであると言える。それぞれの後続文に終助詞「よ」が用いられていることから、(14) (15) の話し手は判断の根拠が眼前の状況によって裏付けられていることを聞き手に伝えようとしていると考えられる。この場合の「だから」は他の「だから」にない、「ほら、やはり私の予想通りだ」という話し手の気持ちを表すニュアンスが含まれているのはこのためであると言える。

以上、「だから」は前件と後件の基底に必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」が存在することを述べた。しかし、まだ問題が残っている。それは、例えば知識「三つの辺が等しい \rightarrow 三角形 XYZ は正三角形だ」に基づき前件と後件を接続する時に日常生活で「だから」を用いることができるのに対

し、学術論文では用いることができないことである。本稿では、その理由を文体的特徴の不一致（つまり文体の理由で「だから」は学術論文で用いることができないこと）に帰するより、むしろ因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定の特徴から論じるべきであると考えられる。詳しくは3.で述べる。

3. 因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定

3.では「だから」と共起し得る表現から、基底にある因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定の特徴を捉えることができることを示す。

1.で挙げた用例(2)(3)のように、「だから」は逆接の接続語と共起し得る。

(2)(3)では前件と後件の基底にそれぞれ「つらい体験をしたので私は人間の正義を信じていない→誠実な人がいるのを知ることがうれしい」、「日本自身が閉そく感に取り巻かれ、見通しが不透明な時代ではある→内向き志向に陥るのではなく、潜在的に高い成長力と可能性を持つASEANとの協力強化が重要だ」といった知識があると考えられる。従って、逆接の接続語と共起している「だから」も2.で見た「だから」と同じく扱うことができる。

因果関係を表す接続語はすべて逆接の接続語と共起し得るわけではない。例えば、「だから」とよく比較される「したがって」は逆接の接続語と共起し得ない⁹。逆接の接続語は前件からの聞き手の予想に反する後件を導くものである¹⁰。従って、逆接の接続語と共起し得ることから、「だから」は前件からの聞き手の予想に反する後件を導き得るものであると言える。

我々は言葉を使って話を展開している時に常に聞き手の中の情報に配慮している¹¹。次の発話内容が聞き手の予想に反するものであると予測する時、話し手は逆接の接続語でその発話を示す。前述のように、「だから」を用いる時には話し手の中に知識「 $P \rightarrow Q$ 」が働いている。従って、話し手は、前件からの聞き手の予想に反する後件を導き得るという特徴を持つ「だから」を用いて後件を示す時に、自分の中に働いている因果関係の知識が聞き手の中にも成立している（または成立する）かどうかを問題にしていないと考えられる¹²。言い換えれば、「だから」を用いる時、話し手は自分の中の因果関係の知識が聞き手の中に成立していない（または成立しない）と仮定する場合があると言える。

⁹ 「したがって」が逆接の接続語と共起し得ないことについては劉（2004a, 2004b）を参照のこと。

¹⁰ 逆接の接続語については、浜田（1995）、野矢（2003）などを参照のこと。

¹¹ 話し手が聞き手の中の情報に配慮するというのは、伝えようとする情報が本来的に聞き手の中に存在するかどうかに対し話し手がどのように認識・認定しているかという問題である。詳しくは森山（1989）、神尾（1998）を参照されたい。

¹² 話し手の中に働いている知識が聞き手の中に成立しているというのは発話時点において問題となる知識が聞き手の中に存在しているということである。また話し手の中に働いている知識が聞き手の中に成立するというのは、発話時点において聞き手の中に存在していない知識が、話し手によって説明され、聞き手に受け入れてもらえるということである。

こうした基底にある因果関係の知識に対する話し手の認識・認定の特徴は次のことから窺える。既に(4)(5)に示したように、前件と後件に因果関係の認められる「だから」は、助詞「こそ」「か」を直後に伴い、「だからこそ」「だからか」の形で前件と後件を接続することができる。

(4)(5)では前件と後件の基底に「欧米では新聞は国民の知る権利の負託を受け、その権利を厳正に行使する義務を負うものとされる → 政府(権力)もその新聞の自立性、報道の自由を侵してはならないということになる」、「コーラ国王は敵国に誘拐された妻を、猿神と猿の軍隊の助けを借りて救出した → この地方において門前にサルがひとときわ多い」といった知識があると考えられる。従って、「こそ」「か」と共起している「だから」も話し手の中の因果関係の知識を示していると言える。

助詞「こそ」は排他的な意味を持っているもの(寺村(1991)、中西(1995)などを参照)。また、助詞「か」は不確かなことを表すものである。話し手が自分の中に働いている因果関係の知識が必ず聞き手の中にも成立している(または成立する)と仮定しているならば、「だから」の直後に排他的な意味を持つ「こそ」をつけることにより、聞き手の中にある因果関係の知識を排除する必要はなからう。言い換えれば、話し手は「だからこそ」を用いることにより、自分の中の因果関係の知識の成立を主張し、聞き手の中に存在していると仮定している、自分のと異なる因果関係の知識を排除しようとしていると言える。

一方、話し手が問題となる因果関係の知識が成立するかどうかに対し自分でさえ確信していない場合に、同じ因果関係の知識が聞き手の中にも成立している(または成立する)と仮定するとは不自然である。従って、「こそ」「か」と共起し得る特徴は、「だから」を用いる時、話し手が自分の中の因果関係の知識が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する場合があることを裏付けるものと言える。

「だから」の後に「こそ」を付け加えることにより、前件と後件の基底に因果関係の知識が成立していることを聞き手により一層強く訴えることができると考えられる。また、前件と後件の基底にある因果関係の知識の成立を自分でも確信していない場合に、「か」を付け加えることにより、当該の知識が成立する可能性があることを聞き手に伝えることができると考えられる。話し手は「だから」を用いることにより、前件と後件の基底にある因果関係の知識の成立を主張しようとする意図を持っていると言える。

更に、基底にある因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定に関する記述で2.の最後に取り上げた問題を説明することができる。2.では、「だから」の前件と後件の基底に必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があると述べた。しかし問題は、その記述を用いて例えばなぜ同じ数学に関する知識「三つの辺が等しい → 三角形 XYZ は正三角形である」に基づき前件と後件を接続する時に学術論文においては「だから」を用いることができないかを説明できないことである。

まず、「だから」が論説文体の書き言葉で用いることができることは次の調査で確かめることが

できる。

(19)は CASTEL-J に収録されている 49 冊の論説文体の出版物¹³における「だから」と「したがって」の使用回数を調査した結果である¹⁴。

(19)		だから	したがって
	使用回数	108	133

この調査結果から、論説文体の書き言葉において「だから」は「したがって」より使用回数が少ないものの、学術論文と異なり、用いることができることは明らかである¹⁵。

学術論文は、著者の主観が許される論説文と異なり、客観性が求められるものである。学術論文で「だから」が用いられない理由は次のように考えられる。学術論文の場合、書き手は証拠と論証の過程さえ提示すれば誰でも同じ結論を導き出すと仮定していると思われる。つまり、論証に必要とされる因果関係の知識が読み手の中にも成立すると書き手は仮定していると考えられる。しかし、前述のように、話し手が「だから」を用いる時、自分の中に働いている因果関係の知識が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する場合がある。従って、学術論文で「だから」が用いられない理由は、因果関係の知識の成立に対する「だから」の話し手(書き手)の認識・認定の特徴によると考えられる。

以上、基底にある因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定の特徴を考察した。

4. 「だから」の特殊な用法

4. では、「だから」が、これまでに見た話し手の中の因果関係の知識を示す用法以外に、聞き手の中に成立している可能性があるとし話し手が仮定している因果関係の知識を否定する用法も持っていることを明らかにする。

例(6)と(20)に示しているように、「だから」は引用の形、つまり「だからといって(だからって)」の形をとって前件と後件を接続することもある。

(20) 今日は兄の誕生日だった。だからって何をするでもないけど。

<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/shesama/0006-7.html>

「といって(って)」と共起している「だから」はこれまでに見た「だから」と異なり、話し手の

¹³ CASTEL-J には講談社によって出された 49 冊の出版物が収録されている。

¹⁴ なお、(19)に示している使用回数は CASTEL-J で用いられている、2文(段落を含む)を接続している「だから」「したがって」の回数である。但し、逆接の接続語と共起している「だから」は含まれていない。

¹⁵ 本稿では、学術論文における「だから」の使用回数について調査は行なわなかった。この点については今後の課題にしたい。

中の因果関係の知識を示すものではない。それは、(6)(20)で前件と後件の基底に「この老婦人にはお気の毒だと思う → 生活保護の適用を緩和するのにはいちがいに賛成はできない」、「今日は兄の誕生日だ → 何をしてもない」といった知識があるとは思われないことから分かる。

(6)(20)は次のような意味を有していると考えられる。即ち、話し手は、聞き手がそれぞれの前件から帰結「生活保護の適用を緩和するのに賛成する」、「何かする」を推論する可能性があるとして予測しているが、その推論の成立を否定しているということである。言い換えれば、話し手は、聞き手の中に知識「この老婦人にはお気の毒だ → 生活保護の適用を緩和するのに賛成する」、「今日は兄の誕生日だ → 何かする」が成立している可能性があるとして仮定しているが、引用の形をとった「だから」(つまり「だからといって / だからって」)でその因果関係の知識の成立を否定しているのである。

従って、この場合の「だから」も知識「 $P \rightarrow Q$ 」を表していると思われる。但し、今までに見た「だから」と異なり、ここでの「だから」が表しているのは、話し手の中にある因果関係の知識ではなく、聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定している因果関係の知識である。「だから」が引用の形をとっているのはこのためであると言える。また、後件が必ず否定の意味を伴っていることから、引用の形をとった「だから」は、聞き手の中に成立していると話し手が仮定している因果関係の知識を否定するために用いられるものであると考えられる。

注意すべきは、「だから」は引用の形をとらなくても、聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定している因果関係の知識を否定するものとして用いられる場合がある、ということである。(21)(22)はその例である。

(21) PKO 自体は有意義で重要なものだ。しかし、だから自衛隊を出すという論理には飛躍がある。(毎日新聞 92.6.20)

(22) 国の安定した財源がかなり必要なのは確かで、消費税と福祉は分けて論じられませんか。しかし、だから即、税率引き上げかは別です。(毎日新聞 94.5.13)

(21)(22)は次のような意味を伝達しようとしている。即ち、話し手は聞き手がそれぞれの前件から帰結「自衛隊を出す」、「即、税率を引き上げる」を推論する可能性があるとして予測しているが、それを否定しているということである。つまり、この場合、話し手は聞き手の中に「PKO 自体は有意義で重要なものである → 自衛隊を出す」、「国の安定した財源が必要なのは確かで、消費税と福祉は分けて論じられない → 即、税率を引き上げる」といった知識が成立している可能性があるとして仮定しているが、その因果関係の知識の成立を否定しているのである。従って、この場合の「だから」も知識「 $P \rightarrow Q$ 」を表していると考えられる。そして、その知識「 $P \rightarrow Q$ 」は話し手の中にあるのではなく、聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定しているものであると思われる。(21)(22)の「だから」は、聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定している因果関係の知識を否定している点で引用の形をとった「だから」と同じである。

但し、この場合の「だから」は三つの特徴を持っている。一つは「だから」が必ず後件の一部をなしていることである。この特徴は、(21) (22) の後続文の構造を次のように示すことができることから分かる。

(21)' しかし、{{だから自衛隊を出す}}という論理には飛躍がある}。

(22)' しかし、{{だから即、税率引き上げか}は別です}。

二つ目の特徴は、(21)' (22)' の下線の部分に示しているように、それぞれの後件が必ずマイナス評価、つまり否定の意味を伴っていることである。この場合の「だから」を含む部分の意味の成立は、マイナス評価を表す表現によって否定されていると考えられる。更に、三つ目の特徴は、「だから」が必ず逆接の接続語と共起していることである。要するに、「だから」はこの三つの条件がともに満たされる状況の下で用いられると、引用の形をとった「だから」と同様に、聞き手の中に成立している可能性があるとし話し手が仮定している因果関係の知識を否定する用法になるのである。

最後に二つの点に注目してみたい。一つは、「だから」に 4. で見た用法があるのは、3. で述べた「だから」の特徴と関係しているということである。3. で述べたように、話し手は「だから」を用いる時、自分の中に働いている因果関係の知識が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する場合がある。言い換えれば、話し手は聞き手の中に自分と異なる因果関係の知識が存在している可能性があるとして仮定している場合がある。話し手は聞き手の中に自分と異なる因果関係の知識が成立していると仮定し、またそれを否定しようとする時に、4. で見た特殊な「だから」の用法を用いると考えられる。従って、4. で見た「だから」の用法は、3. で見た、因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定の特徴に関係していると言える。

次に、劉 (2004a) では「それゆえ(に)」と「したがって」は、前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」があると述べられている。また、「したがって」と異なり、「それゆえ(に)」は直前に「しかし / でも」、直後に「こそ」「か」が現れ得る点でも本稿の「だから」と同じである(劉 (2004a, 2004b) を参照)。しかし、「それゆえ(に)」は「だから」と異なり、「といって(って)」と共起しないし、(21) (22) に示した「だから」の用法もない。ここから、「それゆえ(に)」は「だから」と異なり、聞き手の中に成立している可能性があるとし話し手が仮定している因果関係の知識を否定する用法を持っていないことが分かる。

(6)' この老婦人にはお気の毒だと思います。しかし、*それゆえ(に)といって、生活保護の適用を緩和するのにはいちがいに賛成はできません。

(20)' 今日は兄の誕生日だった。*それゆえ(に)って何をするでもないけど。

(21)' PKO 自体は有意義で重要なものだ。しかし、*それゆえ(に)自衛隊を出すという論理には飛躍がある。

(22)' 国の安定した財源がかなり必要なのは確かで、消費税と福祉は分けて論じられません。

表 1

	「だから」	「それゆえ(に)」	「したがって」
前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」がある．			
話し手は当該の接続語を用いる時，自分の中に働いている因果関係の知識が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する場合がある．			×
聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定している因果関係の知識を否定する用法がある		×	×

しかし，*それゆえ(に)即，税率引き上げかは別です．

本稿の考察結果と劉(2004a)に基づき，「だから」「したがって」「それゆえ(に)」の意味・用法の違いは表1のように示すことができる．

5. 終わりに——まとめと今後の課題

本稿の考察で明らかになった「だから」の意味・用法は次のようにまとめられる．

- ① 「だから」の前件と後件の基底には必然的に知識「 $P \rightarrow Q$ 」がある．
- ② 話し手は「だから」を用いる時，自分の中にある知識「 $P \rightarrow Q$ 」が聞き手の中に成立していない(または成立しない)と仮定する場合がある．
- ③ 「だから」の後に「こそ」を付け加えることにより，前件と後件の基底に知識「 $P \rightarrow Q$ 」が成立していることを聞き手により一層強く訴えることができる．
- ④ 「だから」の直後に「か」を付け加えることにより，当該の知識「 $P \rightarrow Q$ 」が成立する可能性があることを聞き手に伝えることができる．
- ⑤ 但し，「だから」が引用の形を取った時，或いは後件の一部をなしている時は，聞き手の中に成立している可能性があるとして話し手が仮定している知識「 $P \rightarrow Q$ 」を否定する用法になる．

本稿で述べたように，①～⑤のように「だから」の特徴を記述することにより，この語の共起の特徴だけでなく，文脈によって生じる異なるニュアンスに対しても統一的な説明を与えることができる．

最後に，今後の課題を述べておきたい．まず，3.で述べたように，本稿では，学术论文における「だから」の使用回数について調査は行なわなかった(注15を参照)．また，「だから」が学術

論文で用いられない原因は、本稿で明らかにした「だから」の意味的な特徴と関係しているほか、文体の問題が絡んでいる可能性がある。更に、本稿の分析方法は同じく因果関係を表す他の接続語、たとえば「そのため」「その結果」「そこで」「それで」などの記述にどのように生かすことができるかなどの問題もある。これらの点については今後の課題にしたい。

参考文献

- 奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文・その体系性をめぐって」『教育国語』87，むぎ書房，2-19.
- 神尾昭雄（1998）「情報のなわ張り理論」，中右実編『談話と情報構造』，研究社，2-111.
- 甲田直美（2001）『談話・テキストの展開のメカニズム——接続表現と談話標識の認知的考察——』，風間書房．
- 坂原 茂（1985）『日常言語の推論』，東京大学出版会．
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』，くろしお出版．
- 中西久実子（1995）「コソとガ——総記的用法——」，宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』，くろしお出版，296-305.
- 仁田義雄（1989）「現代日本語のモダリティの体系と構造」，仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』，くろしお出版，1-56.
- （1999）『日本語のモダリティと人称』，ひつじ書房．
- 野矢茂樹（2003）「「しかし」の論理」『言語』32-3，18-25.
- 蓮沼昭子（1991）「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4，137-153.
- 浜田麻里（1995）「トコロガとシカシ——逆接続語と談話の類型——」『世界の日本語教育』5，国際交流基金日本語国際センター，193-207.
- ひけひろし（1987）「接続詞「それで」「だから」「したがって」」『教育国語』88，45-59.
- 森田良行（1980）『基礎日本語 2』，角川書店．
- 森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』，仁田義雄・益岡隆志編，くろしお出版，57-120.
- 横林宙世・下村彰子（1988）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6 接続の表現』，荒竹出版．
- 劉 怡 伶（2004a）「接続語「したがって」と「それゆえ(に)」」『日本語教育』120，43-52.
- （2004b）『現代日本語における因果関係を表す接続語の意味・用法——「だから」「したがって」「それゆえ(に)」「その結果」「そのため(に)」を中心に——』，名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文．
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge University Press. (澤田治美訳 (2000) 『認知意味論の展開——語源学から語用論まで——』，研究社.)
- van Dijk, T. A. (1979) Pragmatic connectives, *Journal of Pragmatics* 3, 447-456.